

高橋和男教授追悼号によせて

高橋和男先生は昨年（2006年）11月27日、肺がんのため逝去されました。病の回復が思わしくなく、研究休暇あけの2006年度を療養にあてておられましたが、ついに不帰の人となられました。享年61歳、研究に教育に、もう少しご一緒できるものと思っていただけに、まことに痛恨の極みであります。

高橋先生は、高校を卒業されてしばらく会社に勤めた後、上智大学経済学部に進学され、立教大学大学院経済学研究科修士課程に進学されました。その後、博士課程を経て助手になられ、1980年には専任講師に就任、それ以降、経済学部と大学院の教育に携わってこられました。この間、学部ではご専攻のアメリカ経済史や経済史の講義、ゼミナール、そして大学院での指導を通じて、多くの学生・院生に対し、学問的刺激に満ちた強い影響を与えてこられました。また1995年4月から1997年3月まで大学院主任を務め、学部執行部の一員として、本学の教育・研究の発展のために尽力なされました。

大学院に進学されてからの高橋先生は、ウェイルズ経済史を専攻し、早くから学会誌にもデビューを果たして、その研究は注目されておりました。その後アメリカ経済史に専攻領域を転換して、独立戦争から南北戦争にかけての実証研究をなされましたが、その途上で、成立過程にあるアメリカ国民経済の把握に関する研究史に疑問を抱かれ、高橋先生独自の視角から、これを再構成してみようという研究計画を立てられました。

先生はヘンリー・ケアリーに注目され、1984年度には在外研究の機会をとらえて、膨大なケアリーの著作・文書の目録作成にまで手を伸ばし、ケアリーの全貌を捉えるべく研究を進めておられました。帰国後、ケアリーと関連文献の読破に沈潜されて後、浮上するや、刺激に満ちた論稿を矢継ぎ早に発表されております。

高橋先生の研究の特色は、次のように言えるでしょう。まず、革新主義史学の泰斗シュレジンジャー・ジュニアに伺えるようなジャクソニアン・デモクラシーの評価は、いわば下からの改革が連邦政府の上からの経済過程への権力的介入を是認するものであり、アメリカ中部の下からの経済発展の展望とは対立する構図となる、という点を明らかにしました。そしてこの地域からの展望は、諸個人の自発的創意の組織化、つまりアソシエーションの思想をその基礎に持っていたのであり、ケアリーの思想がそれを象徴するものであった、ということを説得的に示しました。こうして高橋先生は、経済思想の分野からアメリカの地域と国家の関係を眺め、19世紀のアメリカ・ナショナリズムが孕む諸要素の複雑な交錯関係を見事に捉えるにいたりました。

さらに先生は、こうした産業化のキャッチアップ過程にある国が、イギリス産業資本に対抗する局面で、イギリス産の経済理論をどう受容し批判したか、という問題領域に入っていきました。大学院時代に、フリードリヒ・リスト研究で世界の先頭に立っておられた小林昇本学名誉教授の薫陶を受けた高橋先生は、国民経済の対英独立を課題としたアメリカ経済思想の、いわば理論的基盤に分析の刃を向けることになりましたが、けだし当然といえましょう。この数年間、先生は得意の語学能力を生かしてフランス語やドイツ語の文献を検討し、アメリカ経済学の始祖レイモンドとリストの影響関係を、それこそ執拗に読み解いていかれました。その成果である「アメリカ国民経済学と『レイモンド・リスト問題』」(上・中・下)は、先生の最後の命のほとばしりを感じさせる、鬼気迫るものであります。

こうした研究の成果を著書にまとめる計画を練っておられた最中の、まことに無念の死でありました。高橋先生は、レイモンド、ケアリー、パッテンを先生独自の歴史観を支える人物として配した『アメリカ国民経済学の系譜——レイモンドとケアリー——』の出版計画を立てておられました。残されたメモから、先生が、ご著書の構成に大変苦心しておられた様子が想像されます。また、穀物輸出が土壌の輸出となることに批判的だったケアリーが、地域内の食糧自給や資源循環を説いていたことに注目し、「ケアリーの今日性」についてさらに書き足す予定であったことも分かりました。経済のグローバル化時代に、経済思想史家としての高橋先生がさらにどのような論点を付け加えるおつもりであったのか、もはや伺うことができないのは残念でなりません。

研究者としての自覚のとりわけ強かった高橋先生は、アメリカ経済史学会の学会誌創刊号に寄稿されたり、また社会経済史学会編集委員をつとめるなど、学界の発展のために大きく貢献されました。

高橋先生は、晴れがましいことを避けた控えめなお人柄から、生前に奥様と学部葬などの申し出をすべて断ることを相談なさっていたそうです。それでも残された私どもは、気持ちの整理をつける意味で、追悼会と偲ぶ会の開催を奥様にご了承ねがって、多くの方々のご臨席のもと、本年3月3日に無事に行なうことができました。

経済学部は先生のご功績を永くとどめ、衷心からの哀悼と感謝の念を表すために、本号を先生の追悼号といたします。本号には高橋先生のゆかりの方からのご寄稿をいただき、先生のお人柄とご研究を偲ぶにはふさわしいものとなりました。関係各位のご尽力に感謝いたします。

長い闘病生活はつらかったでしょう。高橋和男先生、どうぞ安らかに眠りください。

2007年6月

経済学部長 小林 純